

他者の問題は自分の問題

嶋田昌功

今回の講義では、アルツハイマーについて取り上げ、石黒先生自身を当事者にした視点から、解説を行ってくださった。

アルツハイマーは誰でもなり得る病気だと受け入れる。そして、その状態になった時、適切な対応を取ってもらえるように、自らの事を事前に、伝えておく事が大切だと主張された。一人一人にあった対応を行うことはとても重要であり、これは障害者に対しても、決して例外ではない。



病気・障害を持つことにより、日常生活が困難になり、介助を受けなければ生活出来ない状況に陥ることがある。そして、その介助は時として、適切な接し方でない場合があり、当事者自身に不快な思いをさせてしまう場合がある。あたかもマニュアルに沿うような形で、介助を行っている現状が起きている。

全く自分と同じ考えを持つ他人は、存在しない。同じ対応を受けたとしても、そこから受ける印象は、人によって様々である。介助を必要としている方々を、

病人・障害者とひとまとめにするのではなく、一人の人間として接する事が必要だと考えられる。

介助を行介護者は、このような問題意識を持っている方が殆どである。その反面、現在のシステムや周りの雰囲気と同調するあまり、自らの信念を曲げてしまっている方も少なくない。

確かに周りに合わせ、行動を皆と同じにすることは、生きていくうえで大切である。しかし、それだけになってしまうと、集団の中の一部になってしまう。自分自身という存在が、時として失われてしまう。周りに理解されなくても、自分が正しいと思うことは、胸をはって行動していく。それを続けていけば、周りも理解を示し、共感してくれる人も必ず現れてくるはずである。

受ける側それぞれの考え方があり、全てがお互いにとって良い方向に進むとは限らない。だからと言って、お互いに不満をため込み、現状の問題を見ぬふりをしていたら、一向に前には進んでは行かない。問題点を伝え合い、一緒に考えていく信頼関係を築くことが大切だ。その為には、他者が抱えている問題を関係ないものと考えず、自分がその立場になった時、どのように考えるか、自分の問題として考えることが大切だと考えられる。

今回の講義のテーマ、アルツハイマーだけでなく、病気・障害を持つ可能性は、常に誰にでもある。自分とは無縁だ、関係ないと考えず、自分がその立場になった時、どのような行動を取るべきなのか、考えていかなければならない。

自分の問題として受け入れる事が、他者を理解するうえで、最も大切な事ではないだろうか。

(聞き手：早稲田大学ボランティアサークル積木の会 高沼 大貴)

国際医療福祉大学大学院 乃木坂スクール「語り始めたご本人に学ぶ」
第11回 12月3日(水) 長寿社会開発センター 石黒 秀喜 先生
の講義をうかがって

(嶋田さんは、新宿けやき園在住、杉原素子先生や写真に写っている学生ボランティアが聞きとってレポートをタイプして届けてくださっています。)